

戦後アジアの軍用墓地と追悼―韓国の場合―

原 田 敬 一

はじめに

本稿は、韓国において、軍人の埋葬や追悼がどのようになされ、民衆からどのように受けとめられているか、を考察する。

副題に「韓国の場合」と付したのは、先行する拙論

「戦後アジアの軍用墓地と追悼―台湾の場合―」（佛教大学

『文学部論集』第八七号、二〇〇二年三月）

を意識しているからである。

その論文でも指摘したが、戦後アジアの軍用墓地の歴史と現状を調査し、分析した論考は、管見の限りでは存在しない。少なくとも日本語では、という限定を付けるべきなのかも知れないが、おそらく中国語や朝鮮語でも存在しないと思われる。韓国・ソウルでの調査のおり、係員から、大学の教員が調査に訪れたのは初めてだと驚かれた経験からの認識ではあるが。そう

いった意味で、本稿は先駆的な意味を持つと同時に、外国の問題であるから、読み間違いや誤解の危険性もある。読者諸賢の批判を御願いする次第である。

今回の小論により、中華民国⇨台湾と韓国という東アジアの二ヶ国の、兵士の埋葬と追悼についての一応の探究をまとめることになる。これに、従来から私が進めてきた戦前日本国家における兵士の埋葬と追悼研究をあわせると、一つの「型」を提起することができると思われる。それは、本稿の末尾で果したい。

一 国立墓地の歴史と現状―国立顕忠院（ソウル）―

韓国の首都ソウルの中央を漢江が流れている。その南岸から少し下がったところ、地下鉄の銅雀（Tonggak）近くの銅雀洞に、

「国立顕忠院」がある。建物の名称ではなく、韓国という国家が顕彰する人々を集めた追悼施設と墓地の集合体である。インターネット検索でソウル市の日本語ホームページを見ると、最初の画面で次のように説明されている。⁽¹⁾

国立顕忠院 国立墓地は日本の植民地時代に失われた国権の回復と共産軍の侵略と自由と国家繁栄のために崇高な命を捧げた16万3千余りの殉国者と護国霊が眠っている民族の聖域です。ここは冠岳山のふもとに三面を包むように抱かれ、前方に漢江の流れを眺める43万坪の精気が充滿した安息地です。

国立墓地は1955年7月15日国軍墓地として創設され、軍人と軍の仕事をする軍務員を対象に安置しておりましたが、それから10年後の1965年3月30日に国立墓地として昇格され、殉国者と愛国者を先頭に国家功労者、警察、予備軍なども追加され、1996年6月1日国立墓地の管理を担当していた国立墓地管理所の名称を現在の国立顕忠院に改名されました。

●所在…ソウル市銅雀区銅雀洞、山44-7

●お問合せ：02-826-6238

日本語で説明されるこのホームページは、韓国という国民国家の顕彰行為が、隣国日本に影響を与えるだろうことを承知の

上で作成されているだろうから、あまり愉快なものではないが、全体の構成は、ソウルの「名所」案内であるから、それほど敏感になる必要はないかもしれない。この説明からは、①「日本の植民地時代に失われた国権の回復」、②「共産軍の侵略と自由と国家繁栄のため」、という二種類に大別される目的のために「崇高な命を捧げた」人々を、「殉国者」または「護国の霊」として埋葬し祀る「国立墓地」である、という大きな位置づけが見てとれる。

また、歴史の記述からは、①一九五五年国軍墓地、②一九六五年国立墓地、③一九九六年国立顕忠院、と拡張による改称と発展がたどれる。最初に韓国の軍隊の墓地として創設されたが、十年後に、「殉国者」、「愛国者」、「国家功労者」、「警察」、「予備軍」などの死亡者が追葬されて、国立墓地に発展し、さらに三一年後に現在の「国立顕忠院」となった。まさに国家への「忠」を尽くした人々を顕彰する「聖域」に昇格したのである。

もう少し正確に歴史をたどってみよう。『民族の魂』⁽²⁾という大部の報告書がある。全文ハングルであるが、その中から建設の歴史をたどっていくと次のようになる(年表参照)。

韓国で軍人の墓地の必要を考え始めたのは、戦後まもなくだというのが、この解説書の示す事実である(以下、同書「第一章 沿革」一五―二三頁の記述に基づく)。

表1 年表

1955. 7.15	国軍墓地管理所の創設
1956. 1.16	戦没無名勇士を埋葬（最初の集団）
1956. 6. 6	第1回戦没者追悼記念日挙行
1963. 3.11	愛国者埋葬（最初の集団）
1963.11.21	在日学徒義勇兵、集団として埋葬
1964. 4.25	無名の学徒義勇兵、集団として埋葬
1965. 3.30	国立墓地の地位に昇格
1965. 7.21	警官埋葬（最初の集団）
1967. 9.30	慰霊塔（顕忠塔）・慰霊銘板建設
1969. 4.30	慰霊門（顕忠門）建設
1971.11.17	愛国者埋葬区画（忠勇台）設置
*1974.12.16	新しい「国立墓地」設立の決定
*1976. 4.14	「大田国立墓地」の敷地選定
*1979. 4. 1	「大田国立墓地」の建設開始
1979. 8.29	「大田国立墓地」設置
*1982. 8.27	最初の埋葬（大田）
*1985.11.13	建設完成（大田）
1988. 3.29	殉教精神増進堂開館（ソウル）
1993. 8.10	秘密上海暫定政府高官埋葬（ソウル）
1994. 3.11	慰霊銘板安置堂拡張（ソウル）
1996. 6. 1	機構名称変更（国立墓地管理事務所から国立顕忠院へ）（ソウル）
	*機構名称変更（大田国立墓地管理事務所から国立大田顕忠院へ）（大田）

（出典）「簡易年表」、『民族の魂』所収。*は『大田国立墓地』の記述。

日本の植民地支配から解放されて創設された韓国軍はまもなく、北朝鮮軍との衝突から戦死者が開始める。彼らは当初ソウル市内の褒忠寺（褒忠壇公園内）に埋葬された。やがて戦死者が増加すると、陸軍からまとまった墓地の設置問題が論議されるようになった。一九四九年末に陸軍本部人事参謀部は工兵監室³の協力を得て、ソウル近郊にその候補地を物色し始めたが、一九五〇年六月二十五日に朝鮮戦争が始まったので、中断されてしまった。

朝鮮戦争が推移する中で、激戦地である大邱へ移動した陸軍本部は、各地区での戦没軍人をより南方の釜山市にある梵魚寺や金井寺に設置した「殉国戦没将兵英顕安置所」に臨時的に埋葬し、陸軍兵站団墓地登録中隊に管理させた。

激戦が続き、戦死者の数がしだいに増加すると、陸軍部内ではまた陸軍墓地設置問題が論議されるようになった。戦死者の増加からより大規模な陸軍墓地の設置が必要となったことを示している。今度は陸軍本部人事部が主管することになり、墓地候補地踏査班が編成され、実際の調査を始めた。踏査班が、第一候補を大邱地方、第二候補を慶州地区一带として調査を進めた結果、慶州市

兄山川支流を候補地とすることになった。その一方で陸軍工兵監室が設計図案を懸賞募集するところにまで進んだが、陸軍のより高官団が現地調査して多角的に検討した結果、地域としては偏在しており、浸水の可能性さえあるということになり、他の地域を候補地として再び選ぶ方針に転換して、陸軍墓地設置問題はひとまず中止された。

一九五二年五月六日国防部（国防省にあたる）の局長級会議は、陸軍墓地問題を議論した。陸軍より高度の判断が可能となる国家機関で検討が始まったことを意味する。検討の結果、戦場となった各地に陸軍墓地が設けられているが、それを維持するには多くの予算と人員が継続して必要である、今後は英頭を統一的に管理しなければならず、その方法を考える必要がある、という結論を出した。こうして会議は、国防部第一局賞典課で三軍総合墓地設置を推進すると決め、墓地の名称も「国軍墓地」と称することを決議した。

一九五二年五月二六日、国防部主管で国軍墓地候補地選定のための三軍合同踏査班が編成され、同年十一月三日軍墓地設置委員会も構成された後、踏査班は同年十一月から翌年九月までの十一ヶ月間に七次一〇回の地域踏査を実施した。踏査班は、国防部四名、陸軍本部七名、海軍本部一名、空軍本部一名の計一三名で組織されたように、陸軍中心ではあるが、国防部の主

導のもと三軍が参加して、実際の調査を熱心に行った。これらの機関が「選定基準」としたのは、五つの条件であった。①交通関係（国の中心地であり前線に近接していない場所）、②面積（最低一〇万坪）、③用地種別（国有地公有地優先、やむを得ない場合は私有地も許容）、④配水関係（低湿地を避けて排水が十分に出来る所）、⑤対民衆関係（なるべく民家と集落がない場所）。

踏査の結果、ソウル市の銅雀洞が国軍墓地の候補地となった。一九五三年九月二十九日李承晩大統領の裁可により、同地が国軍墓地敷地と確定した。同年一〇月八日から十一月五日までの測量の後、翌一九五四年三月一日から工兵二個中隊が建設のために投入され、二年後の一九五五年七月一五日に完成した。その間に、墓域七万二〇〇〇坪を造成し、その後一九六八年末までに広場三万坪、林野二十七万六〇〇〇坪、公園・行政地域五万四〇〇〇坪を完成させた。その後の整備も含めて、それぞれの広さは表2のようになっている。

こうして、一九五五年七月十五日、国軍墓地管理所が、国防部一般命令第二一八号で設置され、戦死または殉職した軍人、軍務官、従軍者の英頭を安葬することになった。

その後、一九六五年三月三十日大統領令第二〇九二号で、国軍墓地は国立墓地に昇格し、愛国志士や国家有功者、警察官や

表2 国立顕忠院（ソウル市）の大きさ

墓域	106,000	坪
広場	7,500	坪
道路	38,000	坪
行政地域	4,000	坪
その他	14,000	坪
合計	432,500	坪

戦闘に参加した郷土予備軍も国立墓地に埋葬出来るようになった。その直後とも言うべき同年七月十九日、李承晩もと韓国初代大統領がハワイで死去した。李も大統領は、一九六〇年の四・一九革命で失脚し、下野した後ハワイで

余生を送っていた。死去の一週間後の七月二十七日、ソウルの国立墓地に安葬され、葬儀には数十万の市民が参加したという。一九九二年三月十九日に亡くなった夫人も、同年三月二十三日夫の側に合葬された。二人の遺体を葬った土饅頭型墓は、国立墓地の最も高い位置にある。その後、朴正熙第二代大統領が一九七九年十月二十六日に亡くなると、同じように同年十一月三日に葬られた。彼も夫人と合葬になっている。彼らの墓域は「国家元首墓地」と称されている。

一九五二年に銅雀洞地域が選ばれたのは、風水の地勢による、というのが建設解説書『民族の魂』が語る公式見解である。北に漢江、南に冠岳山の孔雀峰があり、その麓の広い野原が選ばれたのである。孔雀が翼をちゃんと広げたような様子は、將軍が兵士を率いているような姿にも見える、と説明されている。風水の地勢にかなった場所に眠ることは幸せだとされる。

現在ソウルの「国立顕忠院」を訪れると、縦一八・五センチ、横二一センチ、全三四頁、フルカラー、という小型ながら立派なパンフレットを、入り口すぐの案内所でくれる。この案内所には、日本語で案内できる通訳が駐在しているが、我々が訪れた際は不在で、事務所から出てきた係員がその後墓域全体を案内し、最後にはさまざまな資料も進呈してくれた。

この小型のパンフレットの中身はハングルと英語である。日本語のものはない。題は先ほどの分厚い解説書と同じもので、『民族の魂 The Spirit of the Nation』という。国立顕忠院（英文では National Memorial Board とあり、直訳では国家慰霊局になる。「国立顕忠院」にはその意味が含まれていると考えられる）発行の正式のものである。構成は次のようになっている。

概要、簡易年表、顕忠門（見開き二頁の写真と説明。以下同じ）、顕忠塔と慰霊銘板安置堂、「最高の犠牲を払った普通階級 Common Ranks 墓域」、「忠烈台（愛国者と秘密上海臨時政府高官の埋葬区画）」、「相統人のいない Heirless 愛国者の祭壇 Altar」、「前大統領と李承晩夫人」（一頁の写真と説明。以下同じ）、「前大統領と朴正熙夫人」、「有功 Meritorious 市民埋葬区画」、「将校埋葬区画」、「肉弾十勇士顕忠碑」、「特殊部隊員記念碑」、「無名学徒義勇兵記念碑」、「在日学徒義勇兵記念碑」、「愛国的警官記念碑」、「気品を

表3 埋葬及び位牌奉安数（総数）

区分	計	埋葬	位牌	無名勇士
計	181,743	69,438	106,519	5,786
ソウル	162,883	54,454	102,672	5,757
大田	18,860	14,984	3,847	29

（出典）「埋葬と位牌の状況」、パンフレット版『民族の魂』所収。

表4 埋葬現況

区分	埋葬			残余		
	計	ソウル	大田	計	ソウル	大田
総計	69,438	54,454	14,984	36,404	52	32,934
国家元首	2	2				
愛国者	1,399	222	984	378	27	351
国家有功者	89	60	29	745	4	741
軍						
将軍	406	355	51	228	19	209
将校	7,137	4,488	2,649	1,732		1,732
人						
兵士	56,026	46,566	9,460	24,756		24,756
軍務員	2,215	1,952	263			
警察	2,163	808	1,355	5166	21	5,145

*配位 1,306 367 939

（出典）表3と同じ。「配位」とは夫婦で葬られていること。

象徴する泉塔」、「慰霊奉仕(Memorial Services)」、「礼拝儀式」、慰霊堂のパノラマ景観、「慰霊活動」、休息施設の景観、情報、「埋葬と位牌の状況」（後掲表3と表4）、地図

国立顕忠院は、一四三万平方メートル（一四三ヘクタール）もある大規模な地域に展開しているが、その全体を以上のような分節で紹介しているのである。

門から慰霊の中心施設である顕忠塔と慰霊銘板安置堂へ、そこから愛国者をはじめとする各墓域へと進むよう写真と説明が続く。途中には、朝鮮戦争に関わる慰霊碑がいくつも見られる。国立戦争記念館に展示されている朝鮮戦争コーナーでも、学徒義勇兵の戦いが、人形で示されるなど特筆すべきものとされているが、ここでも学徒義勇兵の慰霊碑が二基建立され、大いに称えられている。学徒義勇軍とされているのは、大学生だけでなく、高校生や中学生もいた。各地で学徒義勇軍が戦ったが、なかでも慶尚北道の浦項（ポハング）地区で戦死した四十六名の学徒義勇兵の遺骨が一九六四年四月ここに葬られた。

忠烈台は、独立運動に従事した人々の他、上海臨時政府要人や、朝鮮末期の義兵闘争の戦死者、三・一独立運動の犠牲者なども葬られており、まさに国家的追悼の場の条件を作っている墓域でもある。

遺体の存在する人々は墓地に、朝鮮戦争などで遺体の不明な者は顕忠塔に、と二つの「安葬」法を取っている。墓地には約六万人が葬られ、顕忠塔には一〇万二〇〇〇人の位牌が安置されている（表2）。顕忠塔は、追悼行事の中心地としても機能している。墓地は、何種類かに分かれている。①戦争や事故・病気などで亡くなった軍人、②国家元首、③上海臨時政府要人、④国家有功者、⑤警察官、などで、それぞれ墓域も異なっている。

人々がこれらの慰霊施設を受け入れているというメッセージは、「慰霊奉仕」と「礼拝儀式」の題名の二頁四点の写真、その少し後に「慰霊活動」を表現した一頁の説明文と二頁分六点の写真が、如実に示している。合計一〇点の写真のうち、外国元首の参拝写真は一枚だけで、女学生集団の参拝写真二点、女学生二人の感想文執筆中、女性団体の墓地清掃、墓地巡回参拝中の小学生団体、写真館見学中の小学生団体、と計六点が女性と子どもを対象にした写真となっている。最初に掲げられたほぼ一頁大の写真は、戦没者追悼記念日（第四三回）の顕忠門前における儀式であり、「普通の市民」、「老人達の奉仕活動」という成人集団を取り上げた写真も掲載されているが、女性と子ども六対市民二対国家儀式二（外国元首参拝を入れて）、という比率は、このパンフレットを作成した韓国政府が、「顕忠」

思想の継承者を誰に求めているかを明確に示しているのではないだろうか。戦う兵士に成長するであろう子どもたちと、それを産み育てる母性への期待を現していると考えられる。現在の市民からどのように受け入れられているかは、毎年顕忠日（六月六日）での国家儀式は、ここ国立顕忠院で行われ、韓国の新聞を見ると、毎年さまざまな集団参拝が見られる。その写真は最もオーソドックスな儀式の正面写真一枚だけで、その際会場で多様に示される交歓風景などは無視して、女性と子どもに執着する、この採用された写真は、以上のような推定を可能にしている。

韓国の旅行社のホームページによれば、ソウルの国立顕忠院には「年間二〇〇余万人もの参拝者」があるという。⁽⁴⁾日本人の釜山観光を記したホームページ⁽⁵⁾には、

釜山市内は静かで車が少ないな？と思ったらガイドさんが今日は国民の休日で、愛国独立の烈士及び戦没軍警の英霊を弔う日であり、厳粛な追悼祭が行われる。一〇時のサイレンで全市民も黙祷を捧げ、食堂ではお酒を販売しない日と紹介され

と、おそらく全国一斉のサイレン同時吹鳴があり、食堂でお酒も販売しない緊張の一日としていられると思われる感想が掲載されていた。

それは、六月六日のことで、この日は「殉国の烈士と戦没将兵の崇高な護国精神を追慕」する意味で「顕忠日」とされ、①大統領など政府要人の参加した記念式が、国立顕忠院を会場として、国家報勲処が主管して行われ、②午前一〇時には全国でサイレンが鳴らされ、国民は黙祷を捧げ、家々には国旗である太極旗が掲げられ、③食堂など飲食店では酒類が販売されない⁽⁷⁾などの特色が見られる。顕忠日が定められたのは、一九五七年四月十九日である⁽⁸⁾。朝鮮戦争後の措置であることは言うまでもない。この日には在日本大韓民国民団でも「追念式」が行われている⁽⁹⁾。

二 国立墓地の歴史と現状―国立顕忠院（大田）―

韓国の国立墓地は一つではない。南部の大田市にも設置されている。前章で使用了た公式解説書『民族の魂』では、後半の七〇頁弱が大田市のそれにあてられている。「第一章 設置背景」（二二五頁）は、次のように説明している。

一九五五年七月十五日ソウル市銅雀洞に国軍墓地を設立したが、その後日帝と闘った愛国志士・殉国烈士、朝鮮戦争やベトナム戦争などの戦死者・殉職者が殖えてきたため、銅雀洞だけでは埋葬能力の限界が予測されるようになった

た。そこで一九七四年十二月十六日朴正熙大統領が地方国立墓地設置を検討するよう指示した。国防部は、管理次官補をはじめとする職員六名、民間人二名からなる踏査班を構成し、一九七五年二月から同年一〇月まで九ヶ月間踏査させた。その結果、忠清南道大徳郡柳星邑甲東里と忠清北道清原郡ヒョンド面ノサン里の二ヶ所を有力な候補地とし、朴大統領が一九七六年四月十四日前者（現在の大田広域市柳星区）に大田国立墓地設置を決定した。（二二五頁）ソウル市に設けた国軍墓地は、一〇年後の一九六五年国立墓地に昇格したが、その結果日本の植民地支配と闘った愛国者たちや戦後治安維持に従事していた警察官、さらにベトナム戦争での戦死者などが加わるようになり、埋葬の限界が一九七〇年代前半には予想されるようになっていた。韓国軍のベトナム派兵は一九六五年後半から行われており、この年は日韓基本条約が調印されて、戦後の日韓関係が樹立された年であった。ベトナム派兵による韓米関係の強化、日韓基本条約調印による韓日関係の改善、両者をてこにして韓国経済は、急速な成長を遂げていった。その中で、ソウルの国立墓地での埋葬限界が問題とされ、大田広域市に新しい国立墓地が設けられることになった。二つの国立墓地の歴史は、韓国の戦後史そのものである。

ここを訪れると、一冊のパンフレットが提供された。英文と

ハングルの二種類が用意されている。同文だと思われるが、英文は三一頁、ハングルは二七頁である。題名は『大田国立墓地』。たんに国立顕忠院と言えば、ソウルの国立顕忠院のことで、大田は「国立大田顕忠院」や「大田国立墓地」と呼ばれる。以下、英文パンフレットに従って説明する。

最初の頁には、見開き二頁で山々を背景にした大田国立墓地の全容が、顕忠塔を中心にした写真として示され、そこには次のような導入部が書かれている（拙訳と英文）。

ここは、韓国 の 心 の 中 の 聖 なる 土 地 である。

This is sacred soil in the heart of Korea

永遠に国に生きる人々のために

For those who live in the country forever

日月がこの丘を守るように願う

May the Sun and the Moon protect the hills

パンフレットの最後（三〇、三一頁）は、ビジター情報（交通機関や地図など）だが、そのすぐ前、実質的に本文が終わる二八、二九頁は、これも見開きで顕忠塔の写真が掲載され、そこに大活字で「民族の精神 NATION'S SPIRIT」と記されている。この文言は、ソウルの国立顕忠院のパンフレット表紙に記されていた。同じ精神の下にある、という宣言であろう。これには目次がついており、九つの部分からなっている。番号を付けて

並べると次のようになる。原文を表示することに意味があると思われる場合のみ「」で示す。

- ① 「民族の聖堂 The Nation's Shrine — 大田国立墓地」
 - ② 主な歴史
 - ③ 「慰霊碑と記念碑 Memorials & Monuments」
 - ④ 葬儀奉仕
 - ⑤ 墓地群
 - ⑥ 「崇拜 Worship」
 - ⑦ 「慰霊活動と忠誠への昂進 Enhancement for Loyalty」
 - ⑧ 休憩施設
 - ⑨ 訪問者情報
 - ⑩ は八つの部分からなり、大きな慰霊碑も部分を取り上げて詳しく見ることが出来る配列となっている。配列順は、参拝順でもあり、顕忠門—顕忠塔—「慰霊銘板 Memorial Tablets」—「納骨堂 Channel」—「妖精群像 The Statue of Fairies」—慰霊の泉塔—天馬像—「赤柱門 Red Pillar Gate」—顕忠館—護国館、と全体写真や部分写真で表現されている。
 - ⑪ の文章は短いが、この墓地が持つ意味を端的に語っているものである。全文を訳してみよう。
- 国立墓地は国 the country のために立派に戦った人々が眠っている聖なる場所である。そこは民族 the nation の精神の

中心であり、私たちは殉教者の息吹と郷土 the fatherland 防衛への不屈の意志を感じることができる。

私たちは心の中に彼らの高遠な理想を持ち続け beat、自身を歴史の中に再発見しなければならない。

この英文翻訳は非常に良くできている高い水準のものであることは、誰でも認めるであろう。論理を明確に区別した英語で示しているのである。こういうことである。

亡くなった人々は、故郷である「郷土 the fatherland」のために戦ったのである。それは「国 the country のために」戦ったとも表現されている。それが、次の文章では、「民族 the nation の魂の中心」と、「民族」のエネルギーの根源と表現される。

今私がこの論理と表現に、うまい表現である、という評価を与えたのは、江口圭一氏が提起する「国」概念の曖昧さという問題を上手にクリアしている、明確に意識して人々を引きつけようとしている、という認識に基づいている。江口氏がこのことを述べたのは、一九九四年五月の講演をもとにした『日本の侵略と日本人の戦争観』⁽¹⁰⁾においてであった。そこで江口氏は、英語で「state の政策が悪く、land の環境を破壊するので、nation の利益に反するとして、country 中に非難が起こっている」(五七頁)と区別できることも、日本語では「国の政策が

悪く、国の環境を破壊するので、国の利益に反するとして、国中に非難が起こっている」(同)と意味不明の文章としてしか表現できない、と例を挙げている。英語で「クニ」を表す四種類の表現、国土の land、人々の集団である(また故郷も表す) country、政治的統一体の nation、政府など国家機構である state、は西欧文明では区別されている。

一方、アジアの文明では曖昧さの中に居続けた。せいぜい近代初頭に、日本が「国家」を多用するという乗り切り方しかなかった。「国家」という熟語を創造した中国や受容した古代日本では、国家機構や天子の意味であったものを、領土・国民・主権を包括する意味として使い始めたのは、幕末日本であった。福澤諭吉は、幕末期に使った例(『華英通語』一八六〇年)はあるが、維新後の啓蒙期には殆ど使わなかった(ひろた まさき「福澤諭吉―啓蒙主義的国家観」五三頁、小松茂夫・田中浩編『日本の国家思想』上、青木書店、一九八〇年)。東アジア漢字文明圏ではいわば誤用でしかなかった「国家」の新しい意味づけは、その後東アジア全体に広がった。ただ日本語には相変わらず「クニ」という言葉が残ったため、曖昧に使われ続けた。このことに注意を喚起したのが、江口圭一氏の指摘であった。

①の文章は、これを明確に腑分けしつつ、論理を進展させて、

故郷から国家に結びつけたのが、国立墓地の位置づけで示されている。近代においては、人民は「国家からの自由」を得るとともに、「国家への自由」により国家と一体化する、というのは政治思想研究者の通念であるが、まさに後者への飛躍を求める論理の展開である。

⑥「崇拝」の二頁は、四枚の写真からなる。顕忠日の儀礼、顕忠塔の前で参拝する家族（幼い子ども二人を連れた夫婦と係官か）、顕忠日だろうか、墓標に参拝する家族たち、三軍の兵士が吹奏する中を一齐に墓標の前で座り込み頭を垂れる少年たち（青い制服と黄色いスカーフを着けており、ボーイスカウトだろうか）、という四枚の写真は、家族イメージを強調したものである。続く⑦「慰霊活動と忠誠への昂進」にも一枚の写真が掲載されている。顕忠堂の外と中、顕忠塔への参拝と兵士の儀式、堂の外と中（写真を見ている人々）、外部展示場（一枚は航空機と戦車、一枚は大砲）、造園奉仕（大人や子どもが墓石を磨いているようだ）、美術コンテスト（顕忠門をスケッチしている子どもたち）。ここでも子どもたちの訪問が特色として印象づけられる構成となっていることを確認できよう。ソウルと違って兵器の展示が大きな場所をとって行われているのは、大田の方が広いという単純な理由だと思われる。ただ場所は、入り口から最初の赤柱門に至るまでの途中にあり、それを

見た時には、墓地に来た、というより、軍事博物館に入ってしまったような違和感があった。台湾の軍用墓地である各地の忠烈祠にも、その前庭に兵器を並べている所が複数あった（台北市の忠烈祠では、歴史展示のコーナーはあったが、兵器は並べていなかった）から、それを学んで、兵器の展示に踏みきったのかも知れない。係員からの聞き取りの際、この点は聞き忘れた。いずれ確かめたい。

敷地の構成は、ソウルを見習いつつ一層儀式化の度を強めたものとなっている。地形の関係からか、入り口から数百メートル、アスファルトの道が続き、ようやく儀礼空間にたどりつく。そこには古代以来の「忠誠と貞節 loyalty and chastity」を象徴する「赤柱門」が参拝道いっばいに広がっている。そこから進むと、「泉塔 Fountain Tower」が毎日水を吹き上げている。ここは大田国立墓地の中心になる。この泉塔には、その頂上、中部、底部の壁面などにギリシャ風の彫刻が置かれている。水と彫刻で示される生命により活力が与えられ、それがここに厳粛な雰囲気を与えると期待されて設置された。ここを過ぎると、ようやく大きな儀式が行われる場合には必ず使われる顕忠門の前に到着する。顕忠門は、二頭の虎が狻猊のように両脇を固めている。毎年の戦没者追悼記念日には、ここで儀式が行われる。このパンフレットにも顕忠門に「第45回顕忠日」と横断幕を掲

げ、人々が慰霊行事の開始を待っている、ソウルのパンフレットと同じような写真が掲載されている。

顕忠門を入ると、顕忠塔が目前に立っている。大ききや、中央に塔が立ち、両翼を持ち、両翼の端には兵士や市民、女性など七、八人の群像が置かれている、など多くの点でソウルのものと相似たのである。主柱の下は、半地下の空間が作られ、そこは慰霊の銘板が壁などに収められた安置堂になっていることも両者は同じである。大田では、正面にも群像があるなどの若干の違いがあるけれども。

いよいよ墓地である。広い敷地であるが、墓域は八ヶ所に区分されている。顕忠塔の右奥に「將軍墓地」、同じく左奥に「有功市民 Meritorious Citizens の墓地」、その向かいに「第一殉教者・愛国者墓地」、その手前に「将校 Officers 墓地」、その更に手前、顕忠門の斜め左前に「兵士墓地」、その二つの間に「市民公務員 Civil Employees 墓地」、顕忠門の右の方に「第二殉教者・愛国者墓地」、その手前に「警察官墓地」と整然と区画ごとに並んでいる。このように生前の職務や階級によって墓地を区分するのも、ソウルの国立顕忠院と同じである。

三 韓国における「国立墓地」の特色

国立顕忠院は、ソウル市と大田市に分かれているが、両者とも「国立墓地」という点では変わりはない。ソウル市にある国立顕忠院は、国軍墓地から国立墓地へとという転化を遂げ、大田市の国立顕忠院は、当初から国立墓地であったが、それらは時間的経過の中で現れた特色であって、両者を分けるような意味づけを持ってはいない。軍人たちの埋葬や追悼の施設としては、釜山の国連軍墓地（十四・四ヘクタール、一九五一年創設）もあるが、国連が設けたものであり、韓国の国家的追悼とは距離を置いて考えるべきだと思われるので、ここでは取り上げない。

（一）「国家」の大きさ

大田国立墓地は、ソウル市の国立顕忠院との関係では、いわば第二の墓地として設置されたわけだから、国家としての重要性はソウル市の国立顕忠院が最高である。それを象徴する墓域は二つ存在する。元首墓域と忠烈台である。亡くなった二人の大統領とその夫人、また義兵闘争や三・一独立運動の犠牲者、独立以前の上海臨時政府要人らが埋葬されているのは、ソウルの国立顕忠院だけである。

そこで、大統領が参加する顕忠日追悼式は、ソウル市の国立

顕忠院で行われる。二〇〇一年六月六日盧武鉉大統領は、午前
にここでの追悼式に参加した後、日本を訪れ、午後天皇と会見
したが、帰国後野党やマスコミから袋叩きにあった。植民地支
配の犠牲者も葬られ、追悼している顕忠日に、その支配者であっ
た天皇と会うとは何事だ、という批判であった。⁽¹⁾ 国家と直結し
ている国立顕忠院という意識が、こうした反応の根底にある。

ソウルで発行されている『朝鮮日報』が伝える「事件」も、
国立顕忠院に対する意識を表している。二〇〇三年十二月に南
極・世宗観測基地で遭難したチョン・ジェギョ隊員をどこに葬
るかが問題になった。遺族は「息子は国のために死んだのだか
ら国立顕忠院に葬らせたい」と思い、故人の所属していた大学
の学生たちも署名を集め始めた。しかし国務総理室は『国立
墓地令』は国家社会への功労が顕著である死亡者を国務会議の
議決を経て安置するように定めて」おり、「チョンさんはこれ
に該当しない」という回答をした。遺族は諦めたが、盧武鉉大
統領は再検討を指示したという。⁽²⁾ 結末がどうなったか、二〇〇
四年二月現在の段階ではわからないが、国民の中では「国家の
ために死ぬ」ということと国立顕忠院を結びつけて考えており、
国家の側は、軍人や愛国者を中心に考えていることが明らかに
なった。

いずれにしろ、国軍墓地を国立墓地に昇格させた時点で、韓

国政府は、戦争や軍隊という狭い条件から、国家の追悼を解き
放ち、広く「国家のための死」を追悼し、ある意味では讃える
場として再編成したと言えよう。

(二) 階級差の表現

ソウルの国立顕忠院が一九五五年完成した時には、「国軍
墓地」であった。朝鮮戦争の戦没軍人の埋葬地として出発した
ことは、前述したとおりである。その埋葬方法は、まず墓石の
階級差となって示される。一九七〇年十二月二十九日国防部令
第二一一号国立墓地令施行規則の別紙制式第二号「墓碑等施設
基準」に示された墓石の規定は、

1. 愛国志士・国家有功者・將軍級

高さ九一センチ、三段の土台石、最下段の土台石の幅一

〇六センチ、奥行き九一センチ

2. 將校級

高さ七六センチ、一段の土台石、土台石の幅五五センチ、

奥行き七二センチ

3. 兵士級

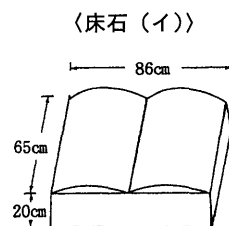
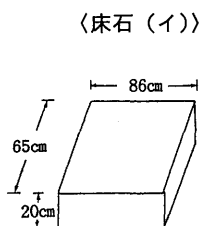
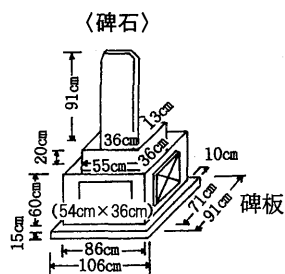
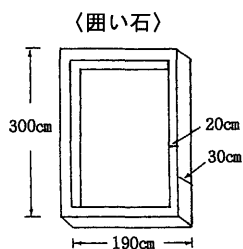
高さ六〇センチ、一段の土台石、土台石の幅四五センチ、

奥行き六二センチ

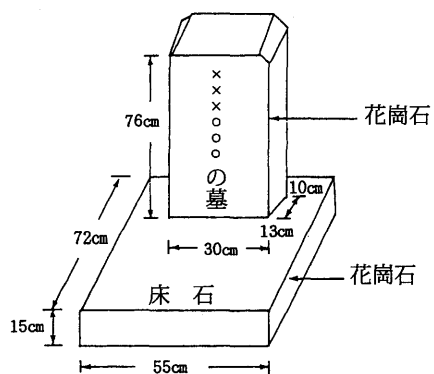
となっており(図1)、明確に大きさが異なっている。ソウル

図1 墓石のモデル

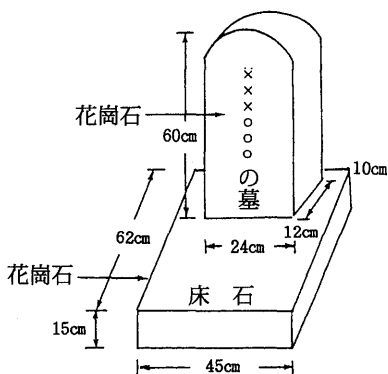
1. 愛国志士・国家有功者・将軍級



2. 将校級



3. 兵士級



※配偶者を合墓しようとする場合には安葬者の碑文左側に配位〇〇〇と刻む。
(出典)『民族の魂』(第4集) 357 頁。

でも大田でも、墓域そのものが將軍級、將校級、兵士級と分けられており、それも一番手前の低い平地に兵士が眠り、奥へ行くほど將校級以上の墓地がより高い丘の上におかれ、入り口から見ると、小さい墓石がだんだん向こうへ行くにつれて大きくなっているのがわかる。軍隊とは何かについて、ある文章は次のように端的に述べている。

軍の根本は、指揮命令が貫徹されることにある。その場合、最後まで命を保障されなければならないのは指揮官であり、兵ではない。指揮官の命と兵の命は等価値ではない。軍はそのような命の値段づけが大前提とされている組織なのである。⁽¹³⁾

「指揮官の命と兵の命は等価値ではない」という、この組織原理を死後までも持ち込んだのが、韓国における「国立墓地」の墓石規定であり、墓域区分である。実際に墓に参ると、大きさだけの違いではなかった。愛国志士や国家有功者、將軍級の墓石は、隅々まで生前の功績を記して、見るだけで故人の歴史をたどることが出来る。しかし、兵士たちの小さな墓石はそれ余裕はなかった。ただ、姓名、階級、戦没地、戦没年月日、が淡々と記されているだけだった。韓国の場合、朝鮮戦争やベトナム戦争など戦後の戦没者が累々と墓石を連ねており、訪れる人は誰でも命の重みを知ることになる。

実は埋葬についても、異なった措置が行われていた。「安葬方法」について、

安葬は遺骨安葬を原則とするが、次に該当する者は遺体安葬の方法を採る

○国葬または国民葬で葬儀を行った者

○殉国烈士及び愛国志士

○国家有功者（外国人を含む）

○将官級

○国防部長官の要請による国務會議の審議を経て大統領が指定する者

と五つの例外を規定し、これらは遺体の埋葬を行うことにしている。⁽¹⁴⁾つまり、一般將校や下士官、兵士は、火葬後の遺骨を埋葬するが、将官級を含む五条件の者は遺体埋葬となる。これは、埋葬地の広さの差となって目に見えることになる。五条件の者は、土饅頭が作られ、その上に大きな墓石が乗っているが、兵士たちは遙かに狭い埋葬地に、素朴な十字架を連ねて眠っている。

(三) 宗教儀式について

埋葬にあたる「安葬儀式」について、前述の公式解説書『民族の魂』は、「合同安葬式順」として、

開式、故人に対する敬礼、宗教儀式（キリスト教、天主教、仏教）、献花及び焚香、弔銃及び黙祷、墓所葬送（身分別）、下棺、撤土、成墳、閉式

と記している。⁽¹⁵⁾ 宗教儀式は、キリスト教の新旧二派と仏教で行うのが通例であるようだ。

一九九五年の韓国総人口調査によれば、韓国国民の五一％が宗教を持ち（ということは四九％が無宗教）、その内訳は、仏教四六％、キリスト教（韓国ではプロテスタントを指す）三九％、カトリック一三％、儒教一％となっている。⁽¹⁶⁾ その意味では、この宗教分布を反映しているかと思われるが、南基仁氏は、一方で

葬式においては、宗教を持たない人々を含み、大部分の国民は儒教の葬式と儒教の先祖祭祀を行っている。

とも述べている。とすれば、国民の宗教的観念一般とは異なった「安葬儀式」を求めていることになり、意味を再検討しなければならなくなる。ただ今回の調査では、この関係に注意しなかったため、今後の調査にまきたい。

むすびにかえて

はじめに、で示したように、台湾（戦後の「中華民国」）に

関する拙稿には、追悼形式についての図を例示している。それを基に、韓国の例を加えて、新しい「型」を示せば次のようなものになるだろう。

戦前日本と戦後の台湾（「中華民国」）では、埋葬と追悼は別個に行われていた。それぞれ独自の埋葬地を持ち（日本・台湾双方とも「軍人」）、追悼は埋葬地とは地理的に離れた全く別の場所に、荘厳な追悼施設をつくり（日本は靖国神社と護国神社、台湾では忠烈祠）、国家的な追悼を行う。

韓国では、追悼と埋葬を両方行う施設をつくり（国立顯忠院）、そこに埋葬地と追悼施設を併存させる。六月六日の「顯忠日」は、国家的行事として、大統領はじめ軍隊や国家有功者

図2 東アジア三ヶ国の追悼と慰霊モデル

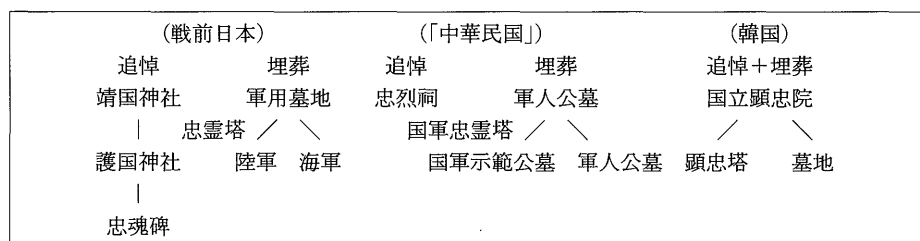


図3 追悼と埋葬

- (A) アメリカ——韓国
(B) フランス——ドイツ——日本——中華民国
〔(B) の変形—UK〕

らの参加した儀式が盛大に執り行われる。

後者は、アーリントン国立墓地などアメリカの国立墓地と同じ役割を果たしている。アメリカは各州に国立墓地があり、軍人が埋葬され、地域の追悼の中心になっているが、国家的追悼の中心は、ワシントンD・Cのアーリントン国立墓地である。

ここには「無名戦士の墓」が設けられ、第一次世界大戦・第二次世界大戦・朝鮮戦争の「無名戦士」が一名ずつ埋葬され、それを二名の衛兵が一定の時間で交代しつつ守っている（ベトナム戦争の一名は、埋葬後氏名が判明したので遺族のもとへ帰された）。南北戦争以来の戦没者の墓が累々と並ぶ中に「無名戦士の墓」があり、追悼の中心として、特別な行事のない時でも機能を果たしている。これと同じものが韓国の「国立顕忠院」だと言って間違いないだろう。

これに対して前者は、特別に設定された軍人の墓地に埋葬するが、追悼はほとんどそこ以外の施設で執り行われる。聯隊の衛戍地にある練兵場なども積極的に使われるが、十五年戦争下で最も重視されたのは、靖国神社とその系譜である。

軍人戦没者の追悼と埋葬について、二つの方法があることが、筆者が行ったアジア三ヶ国、欧米四ヶ国、計七ヶ国の調査により判明した。

フランスやドイツには、それぞれ二つの世界大戦の軍人墓地が多数あり、国家的追悼は首都にある追悼施設（フランスはパリの凱旋門下にある「無名戦士の墓」。ドイツはベルリンにある「新衛兵所（ノイエ・ヴァッヘ）」）において執り行われる。

UK（イギリス）本国には軍人墓地はないが、世界各地にUKの軍用墓地があり、首都ロンドンには国家的追悼施設（「セノタフ」）を設けて、第一次世界大戦の休戦日である十一月に国家行事が行われる。フランス、ドイツの追悼施設と埋葬地という二本立ての変形と考えたい。

つまり、追悼施設と埋葬地のあり方をめぐって、二つのタイプがあることになる。

内容からその型に命名してみると、前者は「追悼・埋葬一体型」、後者は「追悼・埋葬分離型」となる。

フランス、ドイツ、イギリスは、第一次世界大戦で埋葬地の整備に着手し、独自の追悼施設の建設についてもその大戦から始まる。ナポレオン戦争までは、各国とも国王の凱旋門しか建立しなかったことと比較すると、市民革命以後の民衆、やがて国民の登場が、独自の追悼施設の建立を押し進めた深部の力だ

と言えよう。ボーア戦争などのように戦没者の墓地を蔑ろにしていては国民を納得させられない、というのが、UKにおいて第一次世界大戦の戦没者墓地を、戦場であるフランスやベルギーなどに大量に建設・整備した理由であった。⁽¹⁷⁾

日本が、追悼施設と埋葬地を別個にしたのは、欧米の方法の模倣ではない。靖国神社の前身である桜山招魂社（山口県下関市）、霊山招魂社（京都市）が建立されるのは、一八六〇年代後半、陸軍埋葬地・海軍埋葬地が設置されるのは一八七〇年代前半であり、第一次世界大戦で積極化する欧米の国々より相当早い。御霊信仰が盛んであった反映ではないか、と考えているが、今後検討していきたい。

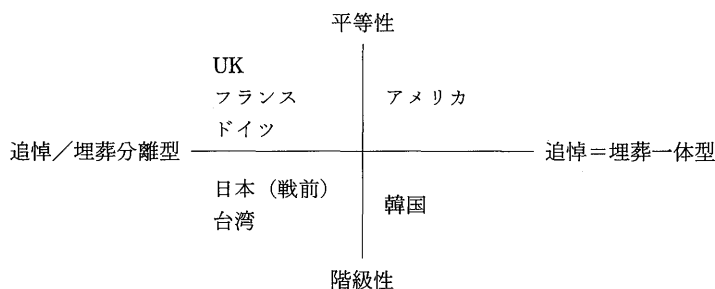
墓地の作り方については、欧米型とアジア型に分かれる。埋葬について言えば、キリスト教が遺体重視で、仏教の影響のあるアジアは遺骨中心とするのは、埋葬文化の相違によるものである。墓地としての最大の違いは、墓標である。欧米型は、階級の高低による差異を作らない。同じ大きさの墓標、四角い墓石、または十字架などの違いはあっても、大きさは同じものをたてる。アジア型では、階級によって墓石の高さや大きさが異なる。階級の上位の者は大きな墓石を、下位の者は小さな墓石でなければならない。日本・中華民国・韓国ともに、墓石の大小だけでなく、階級により墓域も指定していた。韓国の場合、

最高級の身分と考えられる国葬を行った者（具体的には大統領）・愛国烈士・国家有功者・將軍などは遺体埋葬で、その他の者の遺骨埋葬と差を設けている。死後の平等性／階級性で一つの軸が必要な理由である。

これらのことを総合して図2・図3を改造し作成したのが図4「追悼・埋葬方式」である。国家により四種類の区別がある。いずれを採用するかは埋葬文化によるが、それ以上に、それぞれの国家・国民が何を大事と考えるか、によっている。逆に言えば、軍人らの追悼・埋葬方式の中に、国民が何をみつめ続けているか、が示されている。

靖国護持派の人々は、靖国

図4 追悼・埋葬方式



神社の宗教性・歴史性を無視して、なにがなんでも靖国神社を国家が保護し、戦没者祭祀を委任するのが正当である、と叫ぶ。そこには歴史に対する敬意も、現代社会に対する配慮もまったく見られない。一九三〇年代、一九四〇年代の国家が取り決めたことを、その後の国家や社会、国民は変更することが出来ないのだろうか。憲法でさえ取り替え可能と語る人々が、靖国問題のみ神聖不可侵とするのは、前後矛盾している。

靖国護持派の人々の書物やパンフレットを見ると、アメリカやフランス、UKなどの国家追悼儀式、施設を取り上げ、国家が戦没者追悼を行うのは当然だと、その点のみに絞って問題を投げかけるが、どのように戦没者追悼を行うのかは、今挙げた国々でも様々な歴史の変遷を経ている。UKは、ボーア戦争などで戦没者の埋葬をおろそかにしてきたという反省から、第一次世界大戦の戦場に、新しい形の戦争墓地を建設した。この考え方は、フランスやドイツなど参戦各国に大きな影響を与えた。アメリカのアーリントン国立墓地もよく取り上げられるが、第一次世界大戦や第二次世界大戦までの墓石は小さく、形も多様であった。写真等でよく知られている、同じ大きさの十字架を連ねる景観は、朝鮮戦争からベトナム戦争での戦没者以降である。これらの国では、おそらくどのような戦没者追悼をするのか、について、広い議論が存在しているのだろう。

靖国神社に祀ることだけを金科玉条にして、それ以外の祀り方を提案すると、極論に走り無視してしまう、という、報告書「新しい戦没者追悼施設について」に対して靖国護持派が示した狭量さは、国民主権の戦後社会には受け入れられない。そうしたこと、世界の戦没者追悼形式や墓地などを調査するとよく見えてくる。

(付記) 本稿は、「近代国家と民衆統合の研究」の一環として、二〇〇二年二月に韓国を訪問した際の現地調査、聞き取り、文献調査などに基づいて、執筆した。

参加者…長志珠絵(神戸市外国語大学助教授)、岸本寛(鳥取大学地域学部助教授)、白石玲子(神戸市看護大学助教授)、高木博志(京都大学人文科学研究所助教授)、原田敬一、山本真理(研究協力者)調査では、朴洪武氏(東京都立大学大学院博士課程修了生、現在は大学非常勤講師として博士論文執筆中)にたいへんお世話になり、日本人のみの調査では達成できなかったことも獲得できた。班員一同朴氏に非常に感謝している。朴氏の日本近代史研究が実りあるものとなることを参加者一同強く願っており、再び共同調査の機会が持たれ、共同研究へと発展していくことを期待したい。

〔註〕

- (1) <http://japanese.metro.seoul.kr/about/multimedia/ty/sights/sights2>
- (2) 国立顕忠院が一九九九年に発行。全三六六頁。第四集を国立顕忠院から筆者に寄贈された。
- (3) 参謀総長の指揮を受ける特別参謀部のこと(小学館、韓国・

- 金星出版社共同編集『朝鮮語辞典』小学館、一九九三年
- (4) <http://www.lifeinkorea.com/cgi-bin/travinfo.cfm>
- (5) <http://www.melow-club.org/nikkan>
- (6) 大韓航空のHP <http://m.koreanair.co.jp/disp/teyo/syuku>
- (7) 日本人旅行者のHP <http://www.melow-club.org>
- (8) 大田広域市のHP <http://www.metro.daejeon.kr>
- (9) 『民団新聞』のHP <http://www.mindan.org/shinhun>
- (10) 岩波ブックレット三六五、一九九五年一月。
- (11) 「余録」、『毎日新聞』二〇〇三年六月十一日朝刊。
- (12) 「記者手帳：国立墓地に安置されなくても……」、『朝鮮日報』二〇〇三年十二月十五日。HP <http://japanese.chosun.com/site/data/html-dir> より引用。
- (13) 小池政行『戦争と有事法制』一〇八頁、講談社、二〇〇四年一月。
- (14) 前掲『民族の魂』一四一頁。
- (15) 前掲『民族の魂』一四一～一四二頁。
- (16) 南基仁「韓国でもインターネット墓参開始」、『ABC Magazine ニュースダイジェスト』二〇〇一年十二月十七日号。 <http://abc.wpiaps.waseda.ac.jp>。
- (17) 拙稿「第一次世界大戦と大英帝国の戦争墓地―王家・国家・国民」、佛教大学『文学部論集』第八八号、二〇〇四年三月。